

全ての子どもが未来を創る体育学習

—「自ら学習を調整する力」を発揮し、みんなでみんなが「分かる」「できる」—

1 研究主題について

(1) 研究主題

体育科がめざす姿は「豊かなスポーツライフを実現している姿」である。その際、学びに向かう力、人間性等の「運動に親しむ」ことは、豊かなスポーツライフの実現に向けて最も直接的な関係にあると考えられる。そこで、主体的に体育学習に取り組み、学び続けようとする子どもの姿を研究主題に設定することで、めざす子ども像を共有し、授業づくりを進めていきたい。

また、2022年春にスポーツ庁から出された「第3期スポーツ基本計画」には、新たに次の3つの視点が追加された。①スポーツを「つくる／はぐくむ」、②「あつまり」、スポーツを「ともに」行い、「つながり」を感じる、③スポーツに「誰もがアクセス」できる、である。

「つくる／はぐくむ」の視点は、「社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応する」という説明が添えられている。このことから、全ての人が理想を描き、スポーツに参加し続けられるような環境を整えていく必要性が示されたと言える。

では、「全ての子どもが未来を創る」とは、どのような姿を指すのであろうか。

まず、「全ての子ども」は、文字通り目の前にいる一人一人の子どもたちのことを指す。運動やスポーツが好きで得意な子どもだけでなく、運動の苦手な子どもも、進んで取り組めるような授業が前提となる。当然、クラスの中にいる「配慮が必要な子ども」に対しても、適切な支援を行うことも大前提である。そこには、「共生」の視点が含まれるであろう。

・・・「共生体育」とは、全ての学習者が「多様性を受容し合い、それぞれの能力を最大限に発揮する」という「ダイバーシティ・インクルージョン」の理念の中で、豊かなスポーツライフに繋がる資質・能力の育成に資する体育のことです。・・・

・・・スポーツを通して、人には得意不得意があること、しかしそれを補い合えること、またどんな得意不得意の持ち主も、共にスポーツを楽しむことができることなどが学ばれる必要があるでしょう。・・・真正の「共生体育」をつくる 梅澤 秋久＋苫野一徳

次に、体育の授業の中で、子どもたちが「未来を創る」とは、どのような状況であろうか。

単元を通して「未来を創る姿」とは、運動領域においては理想の動きを想像し、保健領域においては理想の生活場面を思い描きながら自らの課題を発見し、理想の動きや生活場面に近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、運動や自己の生活への認識を深めていく姿だと捉えている。

例えば、ネット型の学習において、得点を取りやすいポジションや失点を防いで攻撃につなげるための動きを学んだとしよう。それらを生かして、自陣でのポジショニングをボールの位置によって変化させた方がよいことを自ら考え、試そうとする姿が「未来を創る」学びの具体である。これは体育の見方・考え方を「働かせる」学習の在り方と重なる。全ての子どもが「未来を創る」ためには、「見方・考え方を働かせた」学習の積み重ねが大切だと言えるだろう。

一時間の授業において「未来を創る姿」とは、課題を自ら発見し、課題解決に向けてよりよい方法を探したり、選んだりする姿、課題解決のために練習に粘り強く取り組んでいる姿や友達と協働して解決しようとする姿である。課題を解決した達成感や自己の成長を感じることで、新たな課題を見付け挑戦しようとする姿も「未来を創る姿」と言える。

子どもたちが未来を創り続けるためには、教師の授業づくりも重要である。単に運動欲求を満たすことができる教材や見た目が面白そうな教具を準備するだけでは不十分である。単

元を通して、子どもたちが成功体験を積み、その経験を基にして新たな問いを生み出すことができる授業が求められる。そのような経験を通じて、運動の魅力に気づき「もっと運動したい」という思いを高めることができる。「もっと運動したい」と思いが高まることで、子どもたちは運動に自ら関わるようになる。そして、仲間と協力して課題解決できた経験が積み重なることで、さらに新たな課題に自ら挑戦しようとする姿勢が育まれる。結果として、「もっと運動に関わり続けたい」という意欲も高まっていくだろう。

以下に「未来を創る子どもの姿」を設定する。

《未来を創る子どもの姿》

理想とする動きや生活場面を思い描き、自己を見つめて課題を捉え、よりよい課題解決の方法を選んだり工夫したりして、他者と協働しながら課題解決に向かい、自分の成長を実感し、さらに学び続けようとする子ども。

単元を通して目指す「未来を創る子どもの姿」

運動領域においては理想の動きを想像しながら、自らの課題を発見して、理想の動きに近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、運動への認識を深めていく姿

保健領域においては理想の生活場面を思い描きながら自らの課題を発見して、理想の生活場面に近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、自己の生活への認識を深めていく姿

授業で目指す「未来を創る子どもの姿」

- ・課題を自ら発見し、課題解決に向けてよりよい方法を探したり、選んだりする姿
- ・課題解決のために粘り強く取り組んでいる姿
- ・友達と協働して解決しようとする姿
- ・新たな課題を見付け挑戦しようとする姿

(2) 副主題

木村（2023.3）は、「答えのない問題に立ち向かうことができる力」と「自らの人生をより楽しく幸せにする力」の2つが「自己を調整する力」だと定義している。問題の解決に向けて、知識や技能を組み合わせたり変化させたりして新しい価値を創造することができる人や、問題の解決に向けて目標を明確にし、計画を立て、紆余曲折があっても粘り強く取り組み、達成することができる人は、答えのない問題に立ち向かい解決することができる。また、目標を設定し、自らを省みて、調整しながら物事に取り組める人は、自らの人生をより楽しく幸せにすることができる。

この考えを授業レベルで捉えると、「自ら学習を調整する」とは、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤することを意味する。これには、学習について自らをやる気にさせることや、他者との関わりの中で自らの学習を望ましい方向に向かわせていくことなどが含まれる。

研究主題の説明でも述べたように、主人公は「全ての子ども」である。体育は他教科に比べ、勝敗や記録といった数値的結果によって、「できる・できない」が顕在化しやすい教科である。その上で全ての子どもが自分の運動や健康における自己の課題を捉え、その解決に向けて主体的に学習に取り組んでいけるような授業づくりを目指していかなければならない。

副主題にある「自ら学習を調整する力」は、昨年度の研究でも大切にしてきたことであるが、今年度は「する、みる、支える、知る」と関連させた取り組みに焦点を当てて研究を進めていきたい。運動やスポーツとの多様な関わりが必要であることは明らかであるが、全て

の子どもたちが、主体的に課題を解決していく姿を創り出していく授業には、まだまだ研究の余地があると考える。

令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の「自分のペースで行うことができたなら、もっと体育の授業が楽しくなる」という質問項目の結果からも、子どもたちは自分たちで課題を見付け、多様な関わりの中で運動ができるようになったという経験が、確かな学びとして記憶されていることが分かる。そのような経験は自分の確かな力となり、次に生かされていくはずである。これはまさに、私たちが目指す「未来を創る子どもの姿」ではないだろうか。

教師によって与えられた運動をただ消費していくのではなく、「自分たちで運動をつくっている」と子どもたち自身が感じられる視点を大切にしたい。そのためには、教師が適切なしかけをすることで、子どもたちが運動の魅力や生活場面とのつながりに気づき、「もっと、おもしろくしたい」「もっとみんなで楽しめるものにしたい」などと思いを高めていくことが必要である。

運動との出会いから、「つくっていく」過程を経て、1単位時間、あるいは単元を通して、自分がどのように変化していったかに気付けるようにしたい。自己の成長に気付くことで、「また、やってみたい」「次は、これに挑戦したい」という意欲が生まれる。このような学びのプロセスが、未来を創る子どもの姿につながっていく。

授業では、様々な学習経験や生活経験と運動をつなぐ意識を大切にしたい。その際、生活場面や既習を運動とつなぐ場合は、1時間の授業の中だけでなく、単元を通して、あるいは他の単元や教科と関連付ける形でも展開できる。どの段階で生活・学習経験と運動をつなぐか教師がしっかりと意図して授業を設計することが重要である。

このような考えのもと、未来を創る子どもを育てるために、子どもの主体性に焦点を当て、資質・能力の育成を目指して研究を進めていく。

2 研究の具体について

(1) 領域の特性に合った未来を創る子どもの姿の具体的な設定

(2) 「自ら学習を調整する力」を発揮するための素地づくり

- ①子どもの実態を把握し、学習内容と照らし合わせた教材・教具の設定
- ②スモールステップの成功体験を保障する単元展開の工夫
- ③主体的に他者と関わることのできる学級風土づくり
- ④学び方のよさの実感の共有

研究の土台づくり

(3) 授業の中で全ての子どもが自他の課題に関心をもち、課題解決をする中で、自他の成長を実感できるようにする教師の働きかけ

★運動が苦手な子どもや学習内容に迫ることができていない子どもへの教師の関わり

①見通し 自らの目標に向けて意欲をもち、様々な問題の中から解決すべき課題を見いだすために

(例)・様々な問題の中から、課題を見いだしている姿

②行動 他者と適切に関わりながら様々な方法で粘り強く課題解決していくために

(例)・課題解決に向けて粘り強く取り組んでいる姿

・課題解決に向けて他者と協働している姿

③振り返り 自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に生かそうとするために

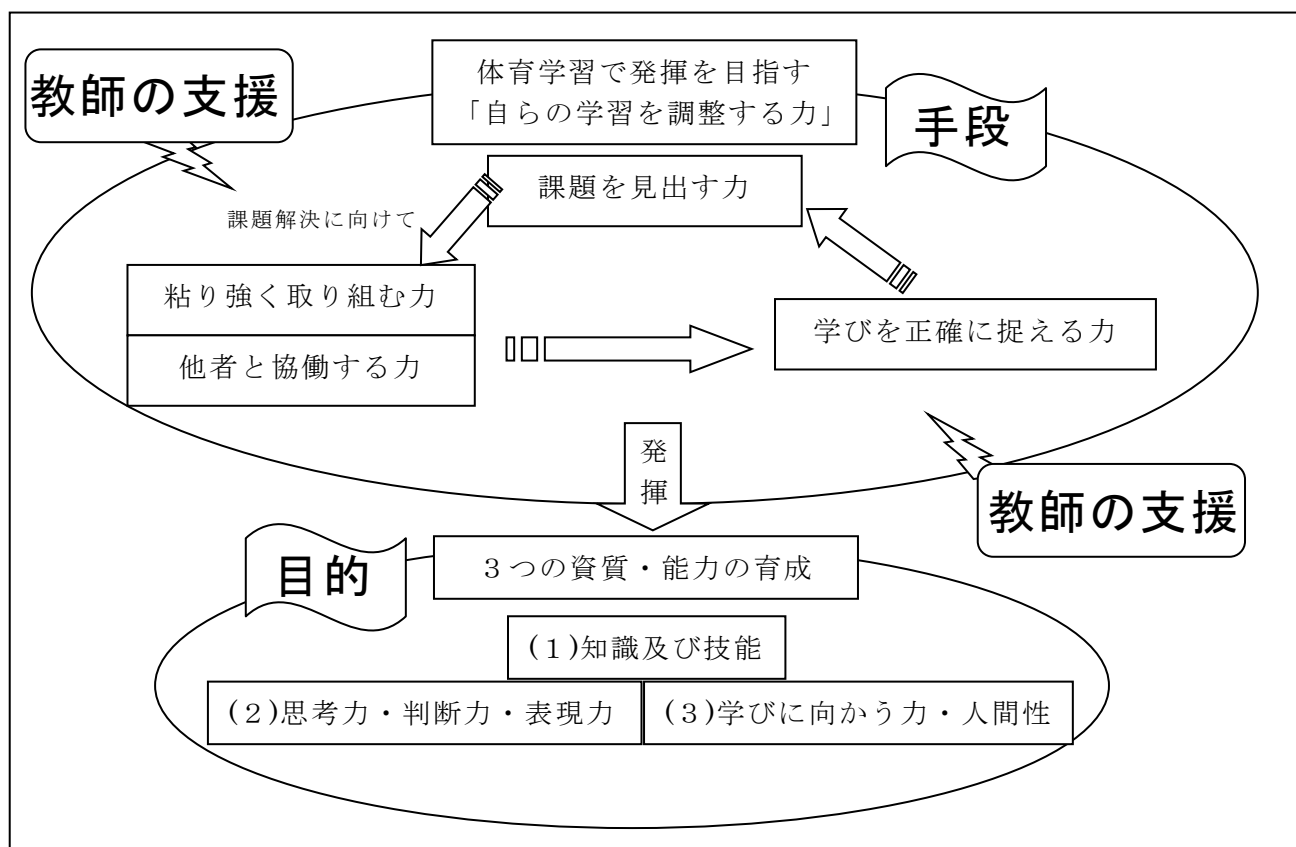
(例)・今後の学習や生活に生かそうとしている姿

研究の内容

本年度、香川県では、目指す子どもの姿を実現するために「自ら学習を調整する力」を発揮しながら、3つの資質・能力の育成を目指した授業づくりに取り組んでいく。

この授業づくりを進めるためには、上記のような授業づくりのステップが大事だと考えられる。他教科や日常の学校生活の中で(1)(2)のように「『自ら学習を調整する力』を発揮するための土台づくり」を行いつつ、授業では①見通し→②行動→③振り返りに沿った授業を展開する。各場面で(3)にある子どもの姿が見られるように教師が支援を行う。そうすることで、子どもたちは「自ら学習を調整する力」を発揮しながら、体育科が目指す資質・能力の育成につながっていくと考えられる。

以下に、イメージ図を示す。



図のように、自らの課題を発見した子どもたちは、その解決のために練習の場を選び、何度も挑戦し、他者の協力を得ながら様々な方法で活動に取り組んでいく。こうした学びが、体育科で目指す3つの資質・能力の育成につながると考えられる。

その際、教師はどう関わるべきなのか。子どもたちが「自ら学習を調整する力」を発揮するためには、教師の適切な支援が欠かせないものとなってくる。さらに、どの力の育成を重視するかによって、教師の支援の仕方も変わってくるだろう。

次頁では、「他者と協働する力」を発揮させながら、器械運動を通じて資質・能力の育成を目指した具体的な実践例を紹介する。

第4学年の跳び箱運動では、単元の初めに実態調査を行った。その結果、台上前転(4段)が35名中27名出来なかった。一方で、第3学年時に開脚跳びを十分に行った実態があったため、本年度は、台上前転を中心とした単元計画を子どもたちと共に立てた。

「自ら学習を調整する力」を発揮するには、「できるようになりたい」「もっとやりたい」など前向きな気持ちが必要不可欠である。しかし、苦手な子どもが多いという状況では、「できた」という成功体験がなければ、学習意欲を高めることは難しい。そこで、体育館全面を使用し、スモールステップで学びを進めていくことのできる場を設定した。

学習を進める中で教師が意識したことは、運動をする子どもだけではなく、運動を見ている子どもへの声かけだった。器械運動をはじめ、ほとんどの運動領域では、一人一人の課題が異なるため、教師一人だけで、全ての子どもの観察を行うことは難しい。そのため、子どもたちが互いに動きを見合い、学び合える環境をつくることが重要であった。

しかし、単に場を設定するだけでは、全ての子どもが適切な学び方を選んだり、他者と関わりながら対話したりするとは限らない。また、教師が指示や指導を続けるだけでは、子どもたちが「必要感」をもって学習に取り組むことは難しく、自ら考え行動する力も育たない。そこで、本単元では、今までの授業の中で技が上達するために子どもたちが効果的だと感じた学び方を共有して蓄積し、視覚的に示して選択できるようにした。また、単元内には動画を撮影するという方法を教示した。すると、子どもたちは友達の動きを見るだけでなく、苦手な子に言語化して伝えるようになるなど、互いに学び合う姿が見られた。

このような学び方ができるようにするためには、「適切なタイミングで、自分の動きと手本の動画を比較するなどの適切な学び方ができるように促すこと」「苦手な子どもを友達とつないだり教師が関わったりするなど課題を見付けて適切な場を選んで練習できるようにしたりすること」など、教師の意図的な関わりが必要である。

さらには、動きに自信がある子は帽子の色を変えることで、苦手な子が自分のタイミングで援助を求められる仕組みを取り入れた。得意な子は、正しい動きを何度もイメージし伝えることで「分かる」「できる」の実感を得ることができた。

このような姿が生まれたのは、これまでに、子どもたちが相手意識をもって友達と関わったり、自分の思いを友達に伝え受け止めてもらったりした経験があったからである。

このような学びを通して、単元の終末には、全ての子どもが台上前転の習得につながるなど、他者と協働しながら課題解決に向かい、自分の成長を実感し、さらに学び続けようとする子どもの姿が見られた。

3 これまでの体育学習との違い

